

公望可臣印全集

第五卷



谷崎潤一郎全集 第五卷

定價一三〇〇圓

昭和四十二年三月二十五日初版發行
昭和四十八年二月十日普及版發行

著者 谷崎潤一郎

發行者 山越 豐

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

目次

女人神聖	一
假裝會の後	一六
兄弟	一七
少年の脅迫	二七
前科者	三九
人面疽	二六
二人の稚兒	三七
金と銀	三七
白晝鬼語	四五
人間が猿になつた話	五五

女人神聖

大正六年九月號—大正七年六月號「婦人公論」

その時分、十三になる兄の由太郎と、十一になる妹の光子とは、器量よしとお洒落とで、専ら界隈の評判になつて居た。「澤崎の家では、彼の子たちを役者や藝者にする氣ではあるまいか。」など、云ふ噂が近所合壁へ擴まつて、眞しやかに人々の口の端へ上つたほど、二人は愛らしくなまめかしい着物を着せられて、人形町の竈河岸の新路に、長い袂を連ねながら、仲よく遊び暮して居た。

兄は學校から歸つて來ると、薩摩紵の筒袖を脱ぎ、對の黄八丈に博多の角帶、キャラコの足袋に雪駄を鳴らして、友禪縮緬の振袖に素足へぼつくりの塗り下駄を穿いた妹の手を把りながら、清正公だの水天宮だの、藥研堀の不動様の縁日などに、さながら繪草紙から抜け出たやうな姿を見せたものである。

「あれを御覽。何と云ふ綺麗な兄妹だらう。」

路を行く人は斯う云つて、睦しさうに歩いて居る二人の様子を振り返つては眼を敬てる。「あれがまあ、大人同士の夫婦だつたら、どんなに羨ましがられように。」と、芳町柳橋の藝者たちが、擦れ違ひざまに投げかける冗談交りの言葉さへ、二人の耳に聞える事が珍らしくはない。その度毎に、兄も妹も小憎らしいほど濟まし込んで、鼻の先に生意氣な薄笑ひを湛へながら、すうと肩で風を切つて通り過ぎるのが常であつた。

二人の顔立ちはさながら左右の掌のやうによく似て居た。年が上だけに、稍肉付きが緊まつて居る由太郎の方は、大人びた鼻の形が、横顔で見ると二枚目役者の家橘の其れに生き寫しで、やゝ受け口の、に、つと結んだ下唇の婀娜つぼさ。肌理の細かい色白の皮膚は薄化粧をしたやうに艶冶を極め、つき／＼しく伸びた項に、青山の霞の如く棚引く襟足は水際立つて、豊國が錦繪の大首にでも畫かせたらばと思はれる、眸の涼しい、眉毛の強い、面長の輪廓である。妹の方も、その美しさは、をさ／＼彼に劣つては居ない。たゞ仕合せは女と生れて、つやつやとした濃い黒髪を、兄のやうに刈り込みにされる恐れがなく、房々と生やして桃割れに結び、豊かに張つた鬢の恰好を、人に誇り得る長所があつた。

「兄妹とは云へ、お前さんたちは二た子のやうだ。いつそ兄さんも女だつたらよかつたのに、惜しい事をしたもんだね。」

人からこんな事を云はれると、いつも光子は勝負事にでも勝つたやうな愉快を覺えて、得意さうに、そつと由太郎を流眄に見るのが、兄には何となく癢に觸つた。彼は折々、妹の目つき口つきを惚れ／＼と打ち眺めつゝ、

「自分の縹緞が此の妹の、此の美しい顔立ちにそっくりだとしたら、自分だつて非常な好い男に違ひない。」

と、獨りで悦に入ることがあつた。彼は鏡を見る積りで、日に幾度も妹の顔を見ては喜ぶ。後から見たり、横から見たり、睨めつくらをして肌理を調べたり、擦りつこをして笑はせて齒列びを観察したり、さうして、「あゝ綺麗だな。」と思ふ度毎に、何だか自分が褒められて居るやうな心地になる。

「男だつて綺麗な人間は綺麗なのだ。己が妹の縹緞に感心するやうに、己も人から感心されるに相違ない。」

彼は内々、そんな風に考へて、無理に満足して居たのである。

彼等の父の鐵三郎は、どんな商賣をして居る人か、何でお金を取つて居るのか、兄妹にはまるで模様が分らなかつた。

「内のお父つあんは相場師なんだよ。」

と、由太郎は嘗て誰かに答へた事はあるけれど、その相場師とはどんな者やら、彼には理解せられなかつた。二人が父に就いて知つて居るのは、毎朝八時頃に家を出て、夕方か、夜遅くか、時とすると夜中や明け方に歸つて來る事である。兜町の取引所へ通ふのださうであるが、仲買をして居る譯でもなく、自分の店があるでもない。家に居る時は大概「相場師」の仲間らしい二三人の客があつて、どうかすると母親も一緒に、御馳走をたべながら酒を飲んで騒いだり、花がるたを引いて夜を更かしたりする。濱町の藤間へ踊りを習ひに行つて居る光子は、そんな場合に、折り／＼座敷へ呼び出されて、母の三味線で餘興を勤めさせられる。家には親子四人の外に、小間使ひとお針と飯焚きと、三人迄も女中を抱へて、諸事贅澤に華やかに暮らして行く生活振りでは、餘程の収入^{みい}がなければならぬ。しかし其の實、内には一向纏まつた財産がないものと見え、差配の男が家賃の催促にやつて來たり、呉服屋の勘定が三月も溜つたりするのは愚かなこと、兄妹が通ふ小學校の月謝にさへも差支へて、母が女中^{ときか}に時借りをする折もある。さうかと思ふと、或る時はまた押し入れの用簞笥の抽き出しに、五圓十圓の札束が一杯に詰め込まれ、それ等が日

に何枚となく、素晴らしい勢ひでばつばつと使ひ捨てられる。すべて此れ等の懷る都合は、頑でない兄妹の目にも餘るほど露骨に外に現はれて、景氣のいゝ時と悪い時では、兩親の顔色から息づかひまで、自づと違つて居るやうに感ぜられた。

「どうして内のお父つあんは、あんなに急に貧乏したり、急に金持ちになつたりするのだらう。」

さすがに兄の由太郎は、子供心にも疑問を起して、相場師と云ふ商賣の正體が、彼にはいよく分らぬものになつて居た。

景氣が餘りによい時と、餘りに悪い時に限つて、きつと兩親は喧嘩をした。景氣が好過ぎると、父は大概歸りが遅く、夜中の二時頃に泥酔したまゝ戻つて來たり、半どんから日曜へかけて、二た晩も家を明けたりする。留守を待ち侘びて居る母親は、六疊の居間の長火鉢に凭れて、鐵瓶の湯の沸る上に、生白い手をだらりとさせ、くやし紛れの茶碗酒をちびちびと呷るのがお定まり。さうして父が歸るや否や、煙管を杖に立て膝をつきながら、噛み着きさうな疵きずを裂いて、夜中であらうが、夜明けであらうが、直ぐにいさかひを起すのである。

二た間を隔てた部屋に寢て居る兄妹は、時ならぬ怒罵の響きに夢を破られて、ふと眼を覺ます事が屢々あつた。それ程兩親の喧嘩口論は凄じく激しく、互ひに口汚く云ひ合つた末に、掴み合ひの始まる事さへ珍しくはない。

「なんだ此の野郎！ そんな出鱈目を云つたつて、此方にやちやんと分つてゐるんだ。さあ吐かせ！ 何處で浮氣をして來やがつたか、眞直ぐにお云ひつてば！」

こんな工合に、息をはずませて半狂亂に喚き立てる女の言葉は、此れが不斷の母親の聲かと訝しまれるほど、下司げすでございで、車夫か船頭の女房のやうに粗野を極めて居た。父親がまた其れに應じて、

「好い加減にしねえかつてば見つともない！ 婆あおやの癖に甚介じんすけなんぞ起しやがつて、」

と、聞くに堪へない惡たれを云ふ。同時に平手でびたツと頬つべたを横擲りにする音や、どたんばたんと疊の上を轉がり廻る地響きなどが、魂消えるやうな悲鳴と一緒に洩れて來て、家鳴震動の大騒動が持ち上る。果ては奉公人の誰彼が見かねて喧嘩の場所へ飛び込み、二人を無理やりに引き離して、宥めなだ賺すかして寝つかせると、双方ともぐつたりと疲れて、そのまゝやすやすと眠りに就く。

父親から婆あおやと罵られる母親は、まだ水々しい年増であつた。漸う三十に手が届いたばかりの、やゝ肥え過ぎて居るほどに肉附きのいゝ、肌は、いつもてらてらと脂漲あぶらぎつて、白くふつくらと光つて居た。おまけに體は大柄で、顔の造作が男のやうに粗く大きく出來て居るので、二日酔ひの明るる朝など、しどけない寢間着姿に、眠れぼつたい眼をしばだゝいて坐わつて居ると、いかにも毒々しい、華魁おきりの古手のやうな感じを與へた。主人と同じ相場師仲間あひだりで、折々遊びに來る惡口屋わるぐちやの相川と云ふのが、「おかみさんはほんたうにお若くつて居らつしやる。」と云ふお世辭の後から、例の地金の舌がすべつて、「いつもつやつやと脂漲あぶらぎつて居らしつて、ちやうど鰻うなぎの白焼しろやきのやうだ。」と、うつかり口走つて以來、「鰻にすればまさに大串」と云ふ極めきはまで附けられて居た。

「此處の大將も、柳橋に可愛いのがあるなんて、ちと道樂が過ぎるやうだね。大串の後で金鰐きんぎを摘まうてんだから。」

こんな調子で一人が冷やかすと、一座の客がどつと笑つて、兩親の様子を顧るのを、幼い二人の兄妹は陰で見て居た折もあつた。

「大串」だの「金鰐」だのと云ふ、大人同士の冗談は、何でそんなに可笑しいのやら分らなかつたが、しかし決して、上品な話でないことだけは、おぼろげながら二人の智慧でも判断される。「内のお父つあんやお母さん^{つか}の行ひを、學校へ行つて修身の先生に話したら、きつと正しい人間だとは云はないだらう。」と、由太郎は子供心につくつくと感じる事があつた。成る程母の前身が藝者だと云ふ噂のあるのは、本當かも知れないと彼は思つた。

由太郎と光子とは、物心が附いてから、まだ一遍も母が手紙を書くところを見たことがない。ちよいとした端書を認めるにも、大概父親か女中が代筆をする。「内の子供は學校の成績が悪くつて困ります。」と、愚痴をこぼす彼女自身が、全體どのくらゐ教育があるのか、誰にもハツキリと推測が出来なかつた。讀本^{よみほん}の復習をする妹の光子が、分らない字を持ち出して尋ねると、母は必ず眉をひそめて、「兄さんにお聞きなさい。」と云ふ。兄が尋ねると、「お父つあんにお聞きよ。」と云ふ。その癖一度も、「私は學問がないのだから。」と、云つた例はないのである。やゝともすれば、どんな立派な學者かと、思はれるやうな幅つたい口さへも利く。「あの女は山出しで、教育がないんだから仕様がな。」とか、「學問のある人間とない人間とは直ぐに分る。」とか、女中に叱言^{こいご}を云ふ際にも、二と言目には其れを持ち出す。「此の頃では英語がはやるんださうだけれど、私が娘の時分には、みんな漢學ばかりでね。」などと、奉公人を煙に巻くのは常の事である。

だが生憎にも彼の女の一舉一動には漢學の素養なんぞは、微塵も認められなかつた。相場師とは云へ、れつきとした商人あきんどの女房でありながら、多勢の男の席に交つて、負けず劣らず大酒を飲み、花合戦に現うつを抜かすのが、いゝ事か悪い事か、小學校の生徒にも分別はつく筈である。時々、恐ろしく酔つぱらつて、現在の亭主を捕まへて、「やい、親爺！」など、甲高い聲で叫ぶのを聞けば、氏も素情も大凡おほよそは知れる。學問の有る無しは兎に角として、裁縫にしろ、料理にしろ、一人前の理窟は捏ねながら、何一つ彼の女自身の手を下してやつて見せたと云ふ仕事はない。それどころか、暇さへあれば自墮落に寝そべつて、都新聞や文藝俱樂部の續き物を讀み耽る。腹が減れば、主人の留守でも、獨りで勝手に好きな物を注文する。お晝のお菜は玉秀たまひでの鳥にしようか、菊水のあひ鴨を喰べようか、難波屋の甘煮を取らうかと、そんな事に氣を揉んで、朝起きると食ひ意地を張らせて居る。午後のお茶受けの時刻が來れば、甘泉堂かんせんどうのしるこ、濱町の福助團子、三橋堂の餅菓子などを取り寄せて、子供より先に自分が煩張つて、しるこならば二三杯、餅菓子ならば五つ六つをべろりと平げる。「内のお上かみさんのやうな身分に、一日でもなつて見たい。」と、女中たちが羨むのも無理のない境涯であつた。

もと／＼根性のひねくれた彼女は、機嫌がよいと誰にでも人なつく云ひ寄る代りに、一旦旋毛つむじを曲げたが最後、意地が悪くて、邪推深くて、云ふ事に一々刺はりがあつたが、たゞ二人の兄妹にだけは、年が年中、まるで人間が變つたやうに優しかつた。由太郎と光子とは學問が嫌ひで、學校の試験に一度づゝ落第して居るのに、あれ程他人の教育をやかましく云ふ母親から、面と向つて意見をされた覚えはないのである。「おつ母さん、あたいは成績が悪いつて、先生が免狀をくれないの。――」

由太郎が尋常四年から高等一年にならうとする時の事であつた。或る日、眼に一杯涙を溜めて學校から駈けて戻りながら、斯う云つて母の膝元にわツと泣き伏すと、

「何だねお前、落第したつて、取り返しはつくだから、そんなに泣かずともいゝぢやあないか。」

と、兩手で抱き上げて、いたはるやうに頭を撫で、睫毛の涙を拭いてくれた母の情の嬉しさを、彼は未だに忘れる事が出来なかつた。

「お前はそれだからいけねえんだ。そんな様方をするから、子供がいつ迄も甘えて居るんだ。」

商賣の忙しさに紛れて、家庭の事に目の届かない父親も、折に觸れてはこんな忠告を試みたけれど、彼女は一向夫の言葉に耳を借さなかつた。「私の生んだ子供だから、私が好きなやうにする。」かう云つて彼女は兄妹を人形のやうに可愛がつた。

試験の成績が悪くても、勉強が不得手であつても、内の子供ほど器量のいゝ子はたとあるまいと云ふのが、母親の自慢の種であつた。娘のお光は無論のこと、男の子の由太郎でさへ、あまり顔だちが美しいので、彼の女には男の子のやうな氣がしない、堅氣の家の息子ならば、木綿の筒袖に薩摩下駄を穿かせるのが普通であるのを、妹と同じくちりめんの長い袂の襦袢を着せて、わざと役者の子役のやうな作りをさせる。それを又、由太郎はいゝ事にして、何でも彼でもお光に負けない氣になつて、まるで年頃の女の兒のやうに、着物や持ち物の贅澤を云ふ。お光が簪を買つて貰ふと、彼はスコツチの烏打帽子が欲しいとねだる。妹が友禪の振袖を纏うて、懷ろには、こせこを忍ばせると、兄はリュウとした博多の帯に、銀鎖の懷中時計を巻きつかせる。一人が鹿の子の半襟を附けたがると、一人は毛絲の襟巻をしたがり、一方が羽織と

云へば一方は外套と云ひ、お召と云へば絲織と云ひ、双方から攻められる度毎に、母はいつでも「あいよ、あいよ。」と悪い顔もせず承知して、云ふなり次第に買ひ與へる。

「なんだ貴様は！ 男の癖に今時分からお洒落なんぞを覚えやがつて、ロクな者になりやあしねえぞ！ お光の相手になつて居ないで、男同士でなぜ遊ばない？ ちつと表へ出て活潑な運動でもするがいいんだ。」

どうかすると父親は、かう云つて由太郎を激しく叱つた。

男の子と生れたからは、由太郎とても活潑な遊戯が嫌ひな譯ではないのだが、彼には此れ迄、男の友達と云ふ者が一人も出来なかつた。たま／＼學校の同級生の遊び仲間へ這入りたいと思つても、先方が相手にしてくれない。「お前のやうな、役者の眞似をして喜んで居る女見たいな人間は、眞平御免だ。」と、何處へ行つても爪弾きをされる。中には正直な子供もあつて、由太郎が近づいて來ると、

「あのね、内のお父つあんがね、お前のやうなお洒落の子供と付き合つてはいけないと云つたから、僕は遊ぶ譯に行かないの。」

と、氣の毒さうに事情を述べて斷わるのもある。

澤崎の家庭の様子に氣が附いて居る近隣の家々では、いづれも親たちが申し合はせて、「あの相場師の子と遊ぶな。」と、子供に云ひつけてあるのもあらう。その證據には光子までが、朋輩の娘たちから其れとなく排斥されて、遠ざけられて居るらしい。竈河岸の通りに、同じ學校へ通ふ娘が五六人あつて、毎朝互に誘ひ合つて行くけれど、光子一人は往くにも歸るにもしよんぼりと仲間外れにされて居る。

「先で意地の悪い眞似をするなら、お前たちだつてそんな人たちを相手にしないがいゝぢやないか。ほんたうに此處いらの子供は、いたづらで、薄汚にくつて、憎にく體らしいつたらありやしない！」

と、母は或る時兄妹の愁訴を聴いて、心外に感じながら毒口を叩いたが、大方内の子供たちは、あまり綺麗過ぎるから、近所の人々に嫉そねまれて居るのだらう、きつとさうに違ひないと、却つて己惚を増すばかりであつた。

二人は友達に疎んぜられた結果として、自然と仲好くしなければならなかつた。「向うが嫌なら此方も遊んでやるもんか。」と、負け惜しみの強い母親の根性がいつの間にやら彼等の胸に込み込んで、知らず識らず器量自慢にもなれば、生意氣にもなつて行く。殊に由太郎は、妹の相手をして居るうちに、だんだん女らしい遊びを覚えて、お手玉だのお弾きだの追ひ羽根だのと云ふ物が器用になり、いつであつたか暮れの藥研堀いの市の晩に、光子と一緒に二人立ちの羽子板を買つて貰つて、喜び勇んで家へ歸つて來た時など、

「ほんとにまあ、お前さんは女の兒のやうだよ。」

と、さすがの母親が、つくづくと呆れ返つたくらゐであつた。

容貌のめでたさ、着物の立派さ、手先の器用さ、——何事にまれ女に負けない由太郎も、たゞ一つ、遊藝の道にかけては、全くの門外漢で、妹の光子の手筋がいゝと云ふ評判を聞くにつけても、口惜しくつて溜らない。なぜ自分には、妹のやうに踊や三味線を習はせてくれないのだらう。男の子だから音曲の稽古をしてはいけなないと云ふ理由はない。光子が通ふお師匠さんの家の俵は、自分と同一年の十三だと云ふけ

れど、此の間の大浚ひに、忠臣藏の勘平になつて、柳橋の半玉の扮したお輕を相手に、道行を踊つたではないか。内へ遊びに来る相場師の一人で、鈴木さんと呼ばれて居る頭の禿げた老人は、男の癖に三味線を達者にひいて、母と一緒に「筑摩川」の連れ弾きをやるではないか。——さう考へると由太郎は我慢がし切れず、「私にも藝事を習はせてくれる。」と、再々母にせびつて見たが、

「お前がそれ程習ひたければ、やらせてもいいと思ふけれど、お父つあんがやかましくつてね。」

かう云つて、母は二の足を踏む。強つて習ひたいと思ふなら、父に内證でも濟むやうなもの、今から通ひ始めたところで、四つの年から稽古を積んで居る妹には、到底追ひ着きさうにもない。後れ馳せに割込んで、いつ迄立つても年下の女の兒に兄弟子振られるくらゐなら一層行かない方が増しだと云ふやうな考へにもなる。其れや此れやで、由太郎はついぐずぐずに過してしまつた。

「女の兒に生れるか、それでなければ藝人の子に生れゝばよかつた。」——彼は此の頃、其れを痛切に感ずるやうになつた。「惜しい事をした。由ちゃん^よが女だつたら、どんな別嬪になつたかも知れないのに、あの子は運が悪かつた。」かう云ふ世間の人の噂が、今更の如く想ひ出されて、何とはなしに、悲しく淋しい心地のする事が度び度びあつた。

行く末のことは分らないながら、現在では少くとも、自分より光子の方が幸福であると思はれなかつた。由太郎がお洒落をすれば、父親は見るに見かねて叱言を云ふけれど、光子が好い着物を着たがつたとて、叱られたと云ふ例^たはない。さうして、内に客があれば、妹の方は酒宴の席へ呼び出されて、大人を相手に、踊つたり唄つたり騒いだりして、やんやと喝采を拍したり、御馳走の招伴に與つたりするのに、兄